

復興支援異分野連携プロジェクト 「イベント復興支援部会」「観光復興支援部会」
復興国際博覧会構想会議 第7回 報告書

開催日時：平成24年1月16日（水）19:00～21:00

開催場所：秋葉原 UDX 4F UDX オープンカレッジ

参加人数：参加者数:23名

【会議概要】

7回目の開催となる今回の復興国際博覧会構想会議。

新産業文化創出研究所の廣常からは博覧会の概要が語られた。3月ごろまではこのような会議を続け、その後は具体的なプロジェクトとしてメンバーを作りながらプロジェクトとプロジェクトの連携などを作っていく。

福山大学の宮地氏からは、今年度学生たちと進めてきた復興支援「花緑博復興プロジェクト」の進捗状況と来年度計画している「沖縄と東北を結ぶ」企画や鉄道復旧のための「鉄研甲子園」企画。復興国際博覧会において、政治への信頼回復、海外からの信頼回復、人との絆などのメッセージ性を入れていくなどの提案がなされた。

JTBの池田氏からは、地域交流ビジネスに力を入れるJTBの取組と、今回受注に至った東北観光博覧会の概要説明が行われた。会場からは、ハードづくりに注力するのではなく、人を財産とすることを望む声が聞かれた。また、復興法などの規定で地元からの立案を待つしかない221市町村に対する支援、ここへの支援を視野に入れた活動とすべきことが議論された。

復興国際博覧会は、今回の東北観光博覧会などの国の事業として行うもの、民間のノウハウや技術を活かしながら行う支援、NPOやボランティアの支援などを有機的に組み合わせ、これら全ての活動自体を博覧会とすることをコンセプトとしている。一つ一つのイベントでは発信力にかけ、BIE認定の博覧会を待つのでは復興支援の時機を逸してしまう。これらの会議で話し合われていること、そしてそこで有機的に結びついてきている支援自体を復興博覧会のムーブメント、実績とし、BIE認定の国際博覧会にまで結びつけていきたい。今回の東北博覧会においても、様々な連携をしていきたいと述べられた。

【プログラム】

■「挨拶及び概要説明」

新産業文化創出研究所 所長 廣常啓一

震災後秋葉原では、創造的復興活動として異分野で連携して復興支援のための活動をできないかという話し合いを重ねてきた。

その中の一つの研究会として当構想会議があるが、従来の博覧会ではない新しい概念の博覧会を模索してきた。ソーシャル系も含めた異分野の支援のための協会を作って、震災以外にも復興を必要としている海外の支援に活用できるものを目指すという意見も出ている。

ナレッジプラットフォームでのワークショップからプロジェクト実現、そして産業創出までのフロー

※オープンイノベーション・プラットフォーム「UDXオープンナレッジ事業」を活用



■「学生との復興のためのイベント取組」

福山大学 人間文化学部 客員教授 宮地 克昌氏

東京観光専門学校で講師を行っている。観光サービス学科でイベントの企画と旅行をセットにした授業を行っている。そこで学生とともにイベントの企画などを作っている。

博覧会・イベントの方向性をきちんと持つべき（主催者、目的、認可など）であり、今回の復興博覧会の特色として盛り込むべき特色としては次のように考える。

- ・国民から政治に対する信頼が失われているのでその復興のためのメッセージの提示。
- ・世界から日本に対する信頼回復。原子力の問題など。エネルギーの方向性などの提示。
- ・T P Pの報告性。他国の復興も考える。
- ・経済復興だけでなく、家族との絆なども。

また、成功のための秘訣としては、鉄道の整備。

今年度＜東日本花緑博復興プロジェクト＞水仙に希望を託すプロジェクト。

- ①東北を応援するメッセージを空き缶でつくる。
- ②陸奥森の湖畔公園でフェニックスの形に二万個の水仙を植える。
- ③3月11日に水仙の花が咲く予定。
- ④花と緑のツーリズム

来年度企画①＜沖縄と東北を結ぶ企画＞夢メッセのらん展の復活

- ①イベント学会のイベントと合わせて、沖縄のらんを復興のために使う。
- ②被災した子供たちを沖縄に連れて行き、いるかと交流させる（計画段階）。

来年度企画②<鉄研甲子園>鉄道を復興させる企画

鉄道サービス学会。全国の鉄道研究会を集めて闘いの甲子園。東北復興のプロジェクトとして、小さなプロ大会を行い、チャリティーをして球根を買い、鉄道の駅に植えていく。番組制作にしていく（テレビ東京）。

<<ディスカッション>>

- ・花のカプロジェクトとの連携、連動。パブリシティの連携も面白い。
- ・花や植栽を植える場所との連携も必要。
- ・染色のための植物を育成し、復興のための色作りプロジェクトなどとの連携。
- ・観賞用の花もあれば、産業用の花・果実による復興支援などもある。
- ・自治体の税金を使ったパビリオンではなく、自治体がペアリング支援をするのも良い。
- ・次世代交通とスマートシティの研究会との連動。

■■「東北復興とJTB」

株式会社ジェイティービー 地域交流ビジネス推進担当部長（東北復興支援担当）

池田 伸之氏

JTBは地域交流ビジネスという分野に力をいれてきた。これは一種のCSR活動（地元密着してイベントなどを通して貢献したり、地元へのコンサルなどを行いながら地域活性化のための貢献をしている）。JTBなどがかかわっているイベントなどはツーリズムのコンテンツであるので、観光立国、地域活性化として活用してもらいたいと考えている。

旅行会社は地元のヒアリングを行えるので、地域活性化を行うことができる。震災を機に、観光とはあまり関係のないと思われていたところ（防災や減災など）が新しい産業として生まれてくるので、他県から訪問してもらえるような仕組み作りができる。

発営業（チケット発券など）から着営業（地元視点をあてる）へと変化していく。

①津波の被災地域：沿岸部：たくさんの復興支援ツアーを行っている。地域によって受け入れができる部分とできない部分がはっきりわかっている。

②復興事業の支援地域：内陸部（地震）：観光事業。

③通常観光可能地域：風評被害。冬場は集まりにくい。

④福島：難しい。明るいイベントで盛り上げる。

<復興支援の学びのプログラム>

語り部によるプログラムなど。時期によって形は変わる。

<東北観光博覧会>

・3月19日スタート。

・観光施設、観光地にたくさん来てもらうPR事業。

・100の観光コンベンションがある。観光資源をポータルや公式ガイドブックを作って広めていく。

- ・旅の駅+食の駅。観光博のパスポートを発給する。コンシェルジュ。場所を訪れるというより、人に会いに行く。
- ・28ゾーン。旅のサロン、旅の駅を地域の人に作ってもらう。このゾーンに来てもらって、近隣につなげていく。
- ・三陸沖の復興なくして、復興博はない。

<<ディスカッション>>

- ・旅の駅の機能としては、ゾーンの中の観光案内。あとはこれから。サロンでパスポートを発給し、旅の駅はスタンプラリーをして立ち寄ってもらう。
- ・28か所のゾーンは同時開催。観光資源を出してもらって、ポータルサイトにて出していく。
- ・パートナーシティのような仕掛けをした方が観光客のモチベーションがあがる。
- ・発地側のキャンペーンも必要。
- ・他から意匠権をもらって、そのシンボルを作るというやり方もある。
- ・パートナーシティは、お礼として逆にその地を訪れることもあるので、ブーメラン効果がある。
- ・被災者の話は観光資源。唯一の体験となる。
- ・沿岸部がほとんど支援対象に入っていないが、観光博覧会の枠を超えても、民間レベルでそれを補う活動へとつなげていくことを考えるべき。
- ・復興法には「221市町村が復興案を立案すること」という取り決めがあるから、東北観光博覧会において支援をしなくてはいけないところの参加が少なくなっているのが現状。
- ・221市町村など、被災度合の大きな地域に関しては、民間レベルの活動があれば東北博覧会に連動していくことはできる。ただし、予算をつけるのは難しい。
- ・魅力づくりに力を注ぐ。前進している姿を映し出す仕掛け。ハードにお金を使うのではなく、人の魅力。
- ・三陸中心に復興リーダーがいる。その人たちの活動を見に行くスキームをいれていってほしい。
- ・活動そのものがテーマ。国の予算、B I Eの許可を待つのではなく、一刻も早く復興国際博覧会に向けた活動を始めた方がよいと考えている。花博から入り、B I Eにもっていく。
- ・街づくり（スマートシティ）を最先端+自然利活用でエリアを決めてやっていきたい。
- ・今泉街道をとりいれて欲しい。
- ・東京（受けの事務局）と地域（情報集め）でPR事業。実際に手のたりないところは、事業が回りだしてから（2月の中旬）。
- ・情報の精査。どういった関係者がいるかが精査基準。
- ・このプラットフォームで情報精査の場とすることができる。